

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 4月30日更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 35,000～39,400 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 36,000～39,000 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500～16,500

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000～161.350 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578～108.350

(おしらせ)

次回の本レポート発行は5月7日(火)の予定です。

エリオット波動とは

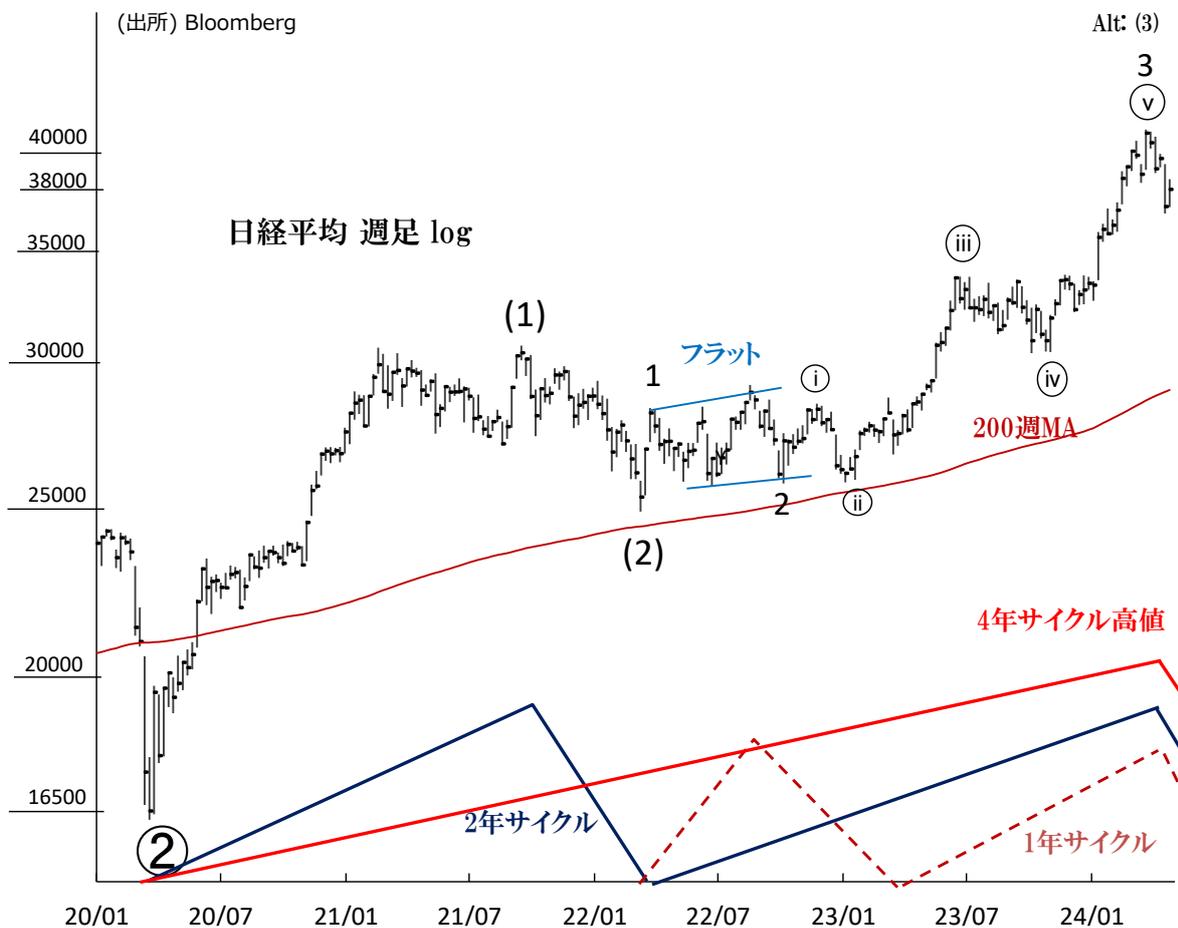
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足・エリオット波動分析】

24,681 円(22/3/9 安値)以来、③-(3)波による上昇トレンドが進行中とみられます。この「サード・オブ・サード」による大ラリーが終わるのは、おそらく 2025 年以降のことでしょう。

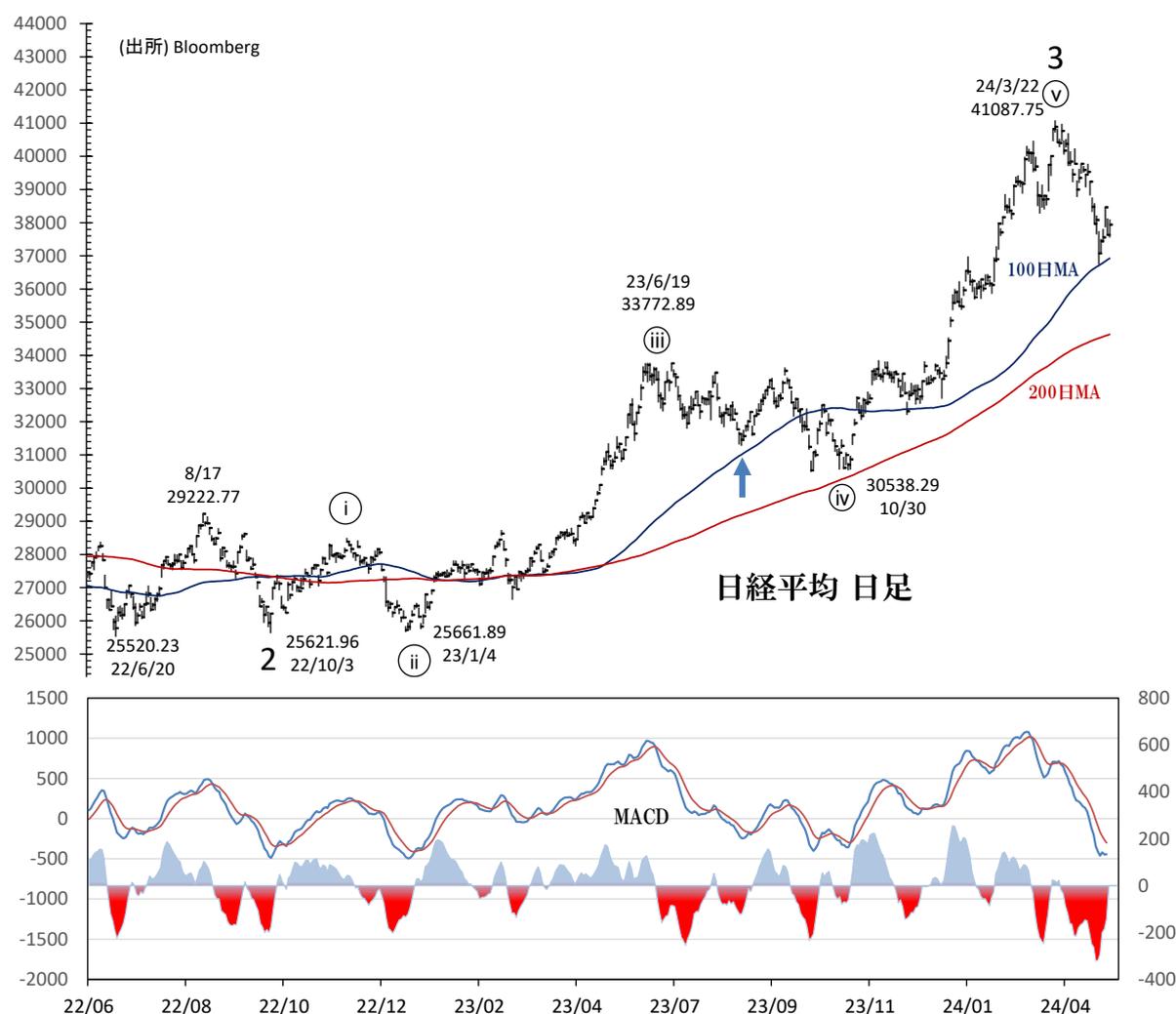
41,087 円(3/22 高値)からの調整局面は、(3)-4 波とカウントされます。

(3)-2 波は、およそ半年間の「フラット」でした。3 月高値からの (3)-4 波は、「オルタネーション(交互)」により、「ジグザグ」か「トライアングル」を形成すると思われます。

日経平均は今後 3 万 5000 円~3 万 4000 円まで下押し可能性があります、そんな下げを以て(3)-4 波は終わり、(3)-5 波の上昇が始まるとみています。

日経平均が最終的に底打ちするのは(現行 4 年サイクルが終わるのは)今年 11 月までのどこかの時点、特に 6 月頃を注目しています。

4 年サイクル(48 カ月)の伸びしろ(オーブ)は 8 カ月(48 カ月の六分の一)です。20 年 3 月から 4 年 8 カ月が経過する時点は今年 11 月です。



【日経平均 日足・エリオット波動分析】

41,087 円(3/22 高値)から第 4 波による調整が進行中とみられます。

4 月 19 日の日経平均は今年最大の下げとなりました。リスクオフの直接的な理由は中東情勢の緊迫化ですが、単なるきっかけに過ぎないでしょう。「山高ければ谷深し」の格言通り、短期的に上がり過ぎた反動として今の調整があります。

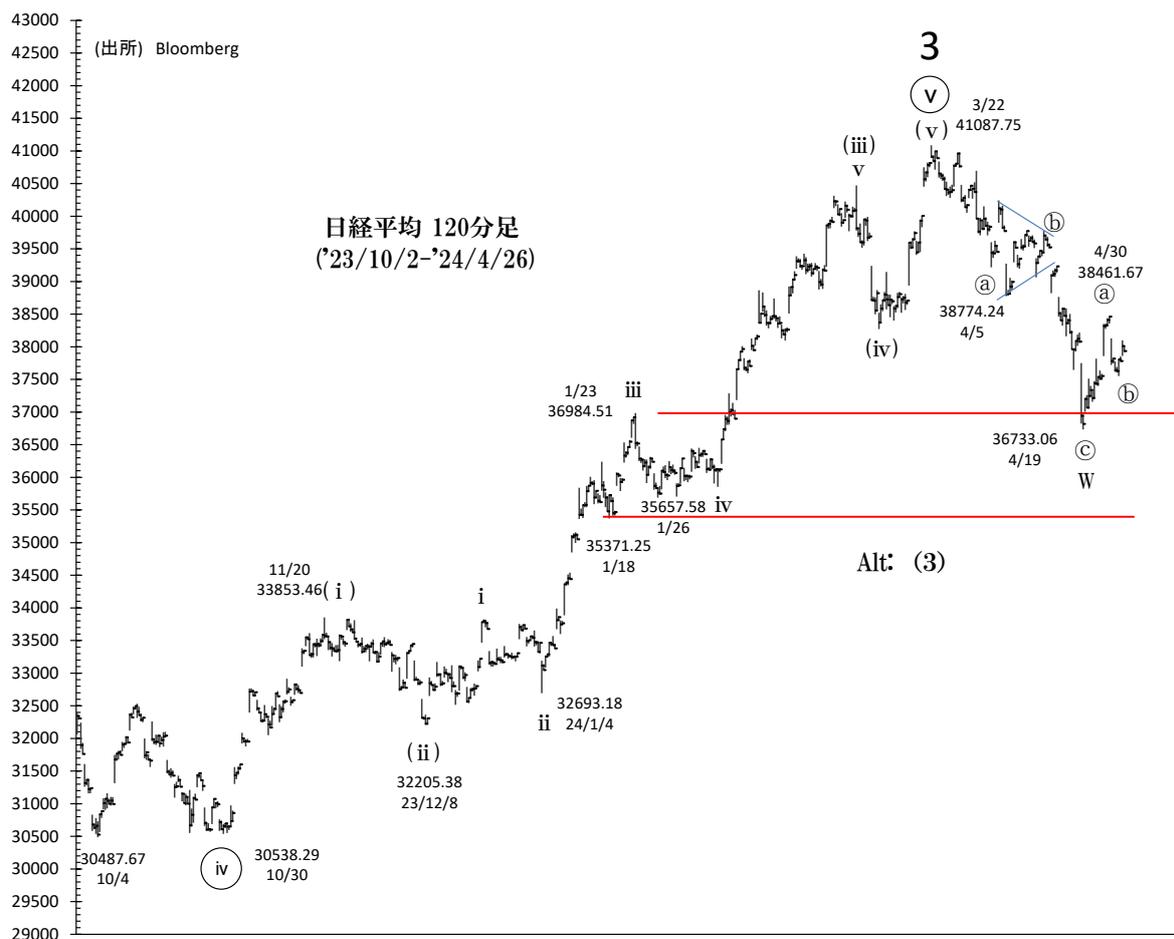
もっとも、いったんは底入れしたとみられ、今後も 2~3 週間はリバウンドが続く可能性はあります。

昨年 6 月から 10 月までの停滞期においても、8 月下旬に 100 日 MA がサポートとして意識され(チャートに↑で示した時点)、日経平均は 9 月下旬までリバウンドしたことがあります。

5 月中旬まで決算発表が相次ぐ中では、「指数より個別銘柄物色」という流れが強まり、指数自体の方向感はずらいでしょう。

もっとも決算シーズン後の材料難のなか、日経平均は改めて調整色を強めるとみられます。

今年は『セル・イン・メイ』の展開かもしれません。



【日経平均 時間足・エリオット波動分析】

日経平均は 36,733 円(4/19 安値)から、X 波によるリバウンドと思われます。

このリバウンドは①-②-③編成となるでしょう。目先的には③波の上昇により、①波高値 38,461 円(4/30)を上回る展開となりそうです。

38,461 円を超え、さらにリバウンドが続くようなら、[38,910 円-39,424 円](同 50%戻り-61.8%戻り)を打診する可能性があります。

もっともリバウンド終了後に訪れる Y 波により、日経平均は以下の下値メドを模索する展開でしょう。

[35,813 円]…マル v 波上昇の半値(50%)押し水準

[35,657 円]…第(iii)波のレッサー・ディグリー iv 波安値

[35,371 円]…1 月 18 日安値

[35,179 円]…上昇第 3 波(22 年 10 月 3 日・25,621 円が起点)の 38.2%押し水準

[34,924 円]…高値から 15%下げ

[200 日 MA=34,631 円](4/26)

[32,870 円]…高値から 20%下げ

【4 月 26 日 16:21 更新】

NYダウ



【NYダウ日足・エリオット波動分析】

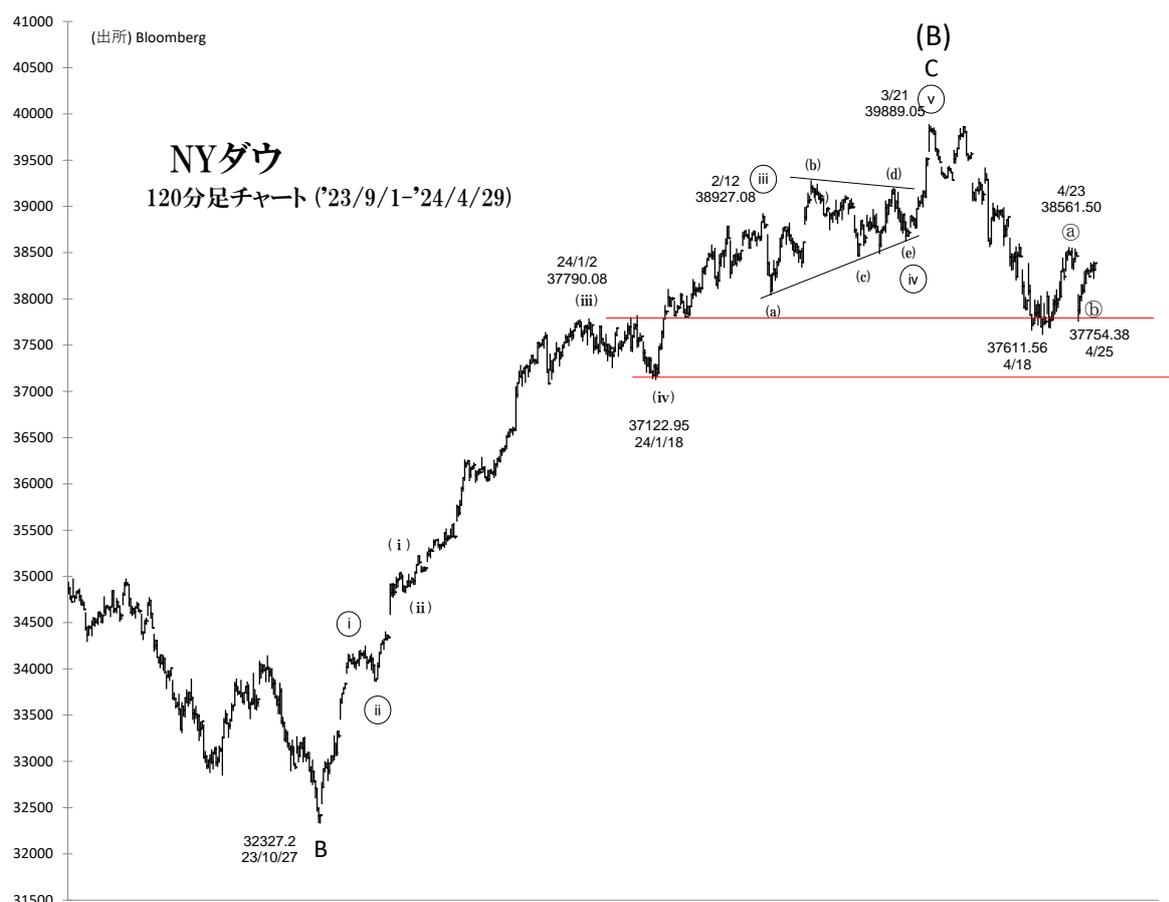
NYダウは22年1月高値(36,952ドル)から、プライマリー級④波が展開中とみています。④波は[エクspanディット・フラット]、[ランニング・フラット]など、複雑なパターンを形成する可能性が高いでしょう。

22年10月安値(28,660ドル)を起点とする上昇は、④波中(B)波による『戻りラリー』に位置付けられます。(B)波はA(↗)-B(↘)-C(↗)の3つの波で構成されます。

23年10月安値(32,327ドル)から5カ月間にわたる(B)-C波によるラリーは、3月高値(39,889ドル)で終わり—日経平均同様に春分の日付近で付けています—(C)波による下落トレンドが始まった可能性が高い、とみられます。

(C)波は5つの波で構成され、(A)波(22年1月高値・36,952ドル⇒22年10月安値・28,660ドル)の22.44%下落に匹敵するか、あるいはそれ以上の大きな下落スケールになるでしょう。例えば[エクspanディット・フラット]の場合だと、NYダウは先方で22年10月安値(28,660ドル)を下回るでしょう。

当面のサポートレベルとしては3万7000ドル処が強そうです。そこには[36,952ドル](22年1月高値)と[37,000ドル](23年10月からの上昇の38.2%押し)が重なっています。



【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

39,889 ドル(3/21 高値)から、(C)波による調整局面が進行中とみられます。

37,611 ドル(4/18)からはリバウンド(Ⓐ-Ⓑ-Ⓒ)とみられます。

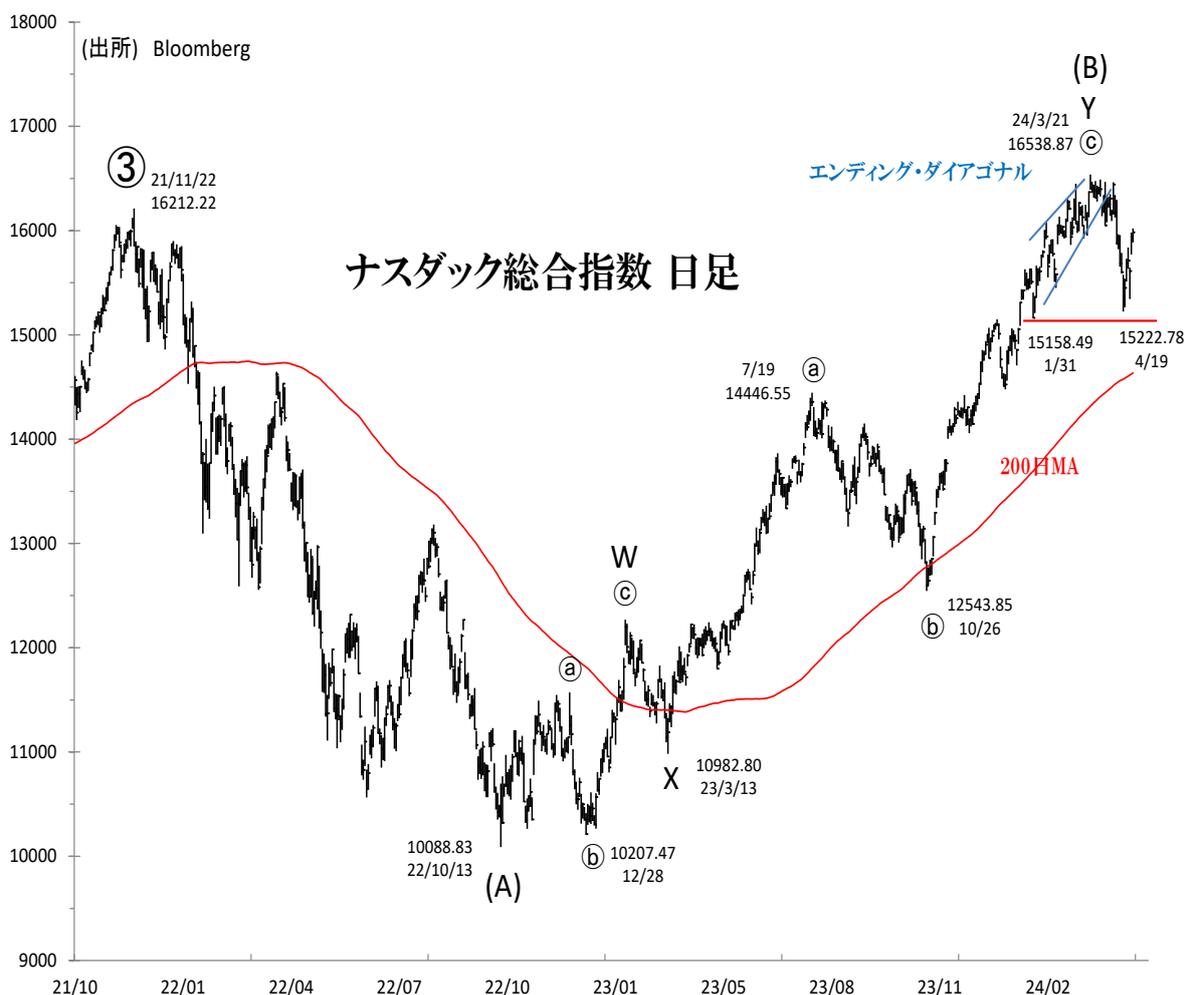
38,561 ドル(4/23 高値)はⒶ波トップ、37,754 ドル(4/25 安値)はⒷ波ボトムとカウントできます。この見方に基づくと直近はⒸ波による上昇局面となり、目先では 38,561 ドルを上回ることでしょう。

38,561 ドルを超えさらに上値試しの場合には、**[38,750 ドル]**(3 月高値からの下げ幅の 50%戻り)を打診するでしょう。

短期リバウンドを経て NY ダウは、3 万 7000 ドル水準を試す展開が想定されます。

【4 月 30 日 8:55 更新】

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

21年11月高値からは、プライマリー級第④波に位置付けられます。この第④波の全体像は、[トライアングル]や[フラット]など保ち合い相場が想定されます。

22年10月安値から④-(B)波による上昇は、16,538(3/21 高値)を以て完了し、④-(C)波による下落トレンドが始まったと思われます。そうであれば、この先ナスダックは [12,000-10,000]へ向けた調整となりそうです。

調整はまだ序盤に過ぎず、今後の下落リスクは高いとみています。当面は200日MA※への下値試しを想定します。

※200日MA…14,633(4/29)



【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・エリオット波動分析】

22 年 1 月高値 (4068) 以来のパターンは[エキスパンディット・フラット]、あるいは[ランニング・フラット]と想定されます。どちらのパターンも内部構造は(A)↘-(B)↗-(C)↘です。

[エキスパンディット・フラット]の場合、(C)波の下落により、SOX 指数は 22 年 10 月安値(2089)を大きく下回るでしょう。

[ランニング・フラット]だと、(C)波の下落によっても 22 年 10 月安値は維持されます。それでも(C)波のスケールは、22 年の下落(A)波に匹敵する大きなものになると思われます。

3 月以来の下落パターンは、「ワン・ツー、ワン・ツー」とみられます。

この見方通りなら、SOX 指数は近いうち、「サード・オブ・サード」による急落を迎えるでしょう。その際は、まず 4000 処を試す展開となりそうです。

[4022]…(22 年 10 月からの上昇に対し 38.2%押し水準)

200 日 MA…4013(4/29)

【4 月 30 日 9:08 更新】

米ドル/円



2011年10月の75.570円以来の(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安⊗波は、151.899円(22/10/21)を以て終わり、そこから2028年頃までレンジ相場を形成していく、というのが筆者による米ドル/円(ドル/円)の基本観です。直近は34年ぶりドル高・円安となっていますが、それも基本的には、レンジ相場内の値動きの一環です。

【月足・エリオット波動分析】

22年10月以来の『円高局面』は、長期円安トレンドにおける中間波・⊗波に位置付けられます。この⊗波は2028年頃まで大きなレンジ相場(トライアングル、フラットなど)を形成するでしょう。

ドル/円は4月29日に一時160円台へ上昇し、直後の円買い介入らしき動きによって一時的に154円台まで一気に下げました。ちょうど34年ぶり(フィボナッチ数)に、90年4月高値(160.360円)に「里帰り」を果たしたわけですが、それは第(Ⅲ)波中レツサー・ディグリー第IV波の高値であり、水準面でもドル/円の戻りに相応しいものです。

ドル/円天井(B波終了)のタイミングとして24年4月に注目していました。ドル/円の8年サイクル※は転機を迎えた可能性があります。

※およそ8年間隔でドル/円高値が巡る『8年サイクル』を振り返ると、過去もっとも長いサイクル期間は106カ月(98年8月～07年6月)でした。前回サイクル高値(15年6月)から106カ月経過時点が24年4月です。



【週足・エリオット波動分析】

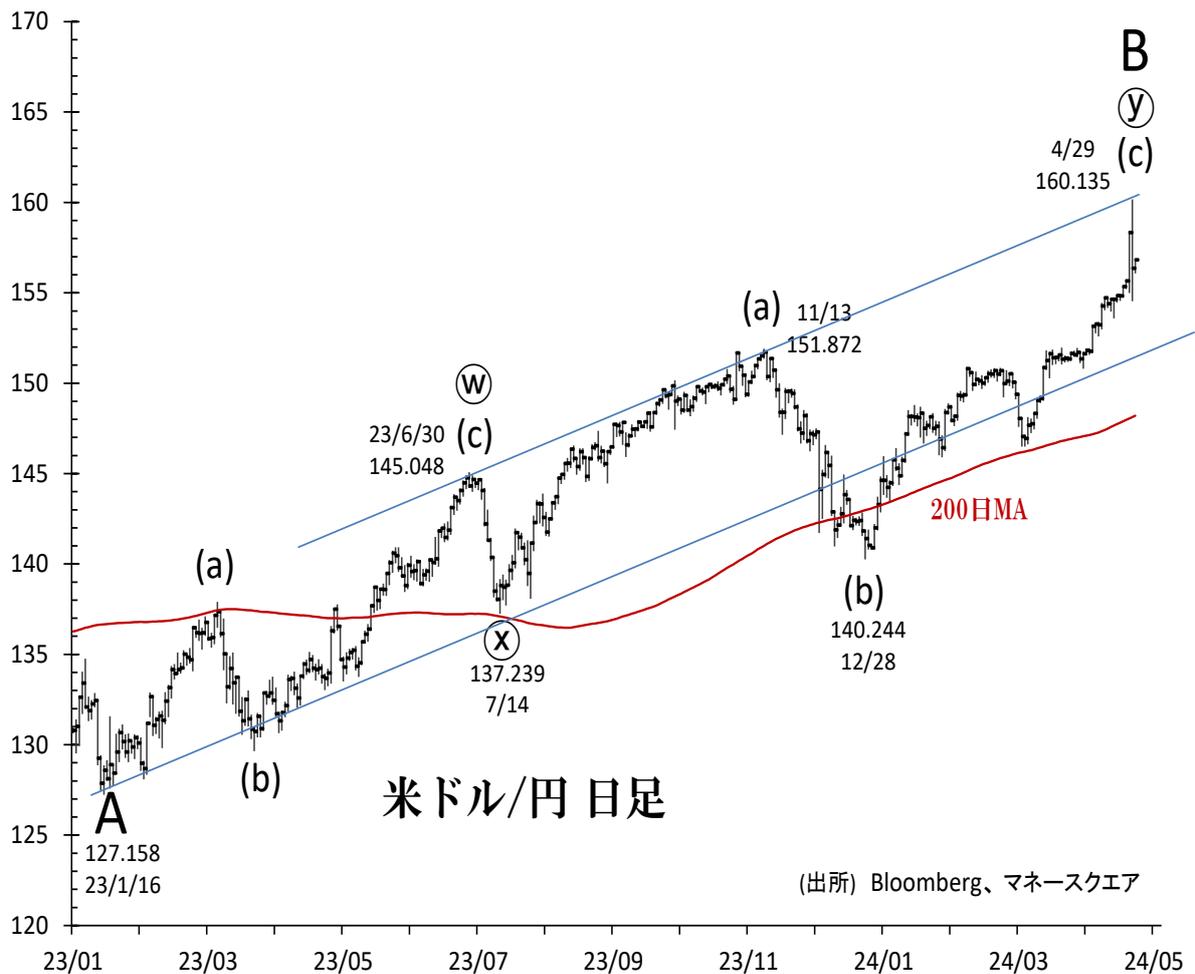
23年1月(127.158円)以来のドル/円の波動構成は、波の重なりが多いチョッピー(choppy)なものです。これはつまり、23年1月からのドル/円上昇は推進波(5波構成)ではなく、修正波としてのB波であることを意味するものです。

B波は不規則天井(イレギュラー・トップ)とみられます。この場合、B波の長さはA波のそれに対し1倍超~1.382倍の範囲で決まる傾向が強いとされます。

今回の場合、A波とB波の長さが1:1.382になるとみれば、**[161.350円]**という値が得られます。それは**B波の上限とみることができます。**

なおほとんどの市場関係者が「介入効果は一時的」という見方で一致しているようですが、決めつけは禁物です。コンセンサスは当てにならないことが多いからです。特に今のように長期サイクルの変わり目では、介入効果は決して小さくありません。

ひとつ例をあげましょう。1ドル=75円で40年の円高時代が終わったのは2011年10月30日のことでした。それまで「介入は効かない、効果は一時的」と言われていましたが、円安転換へのきっかけは、この日の円売りドル買い介入だったのです。



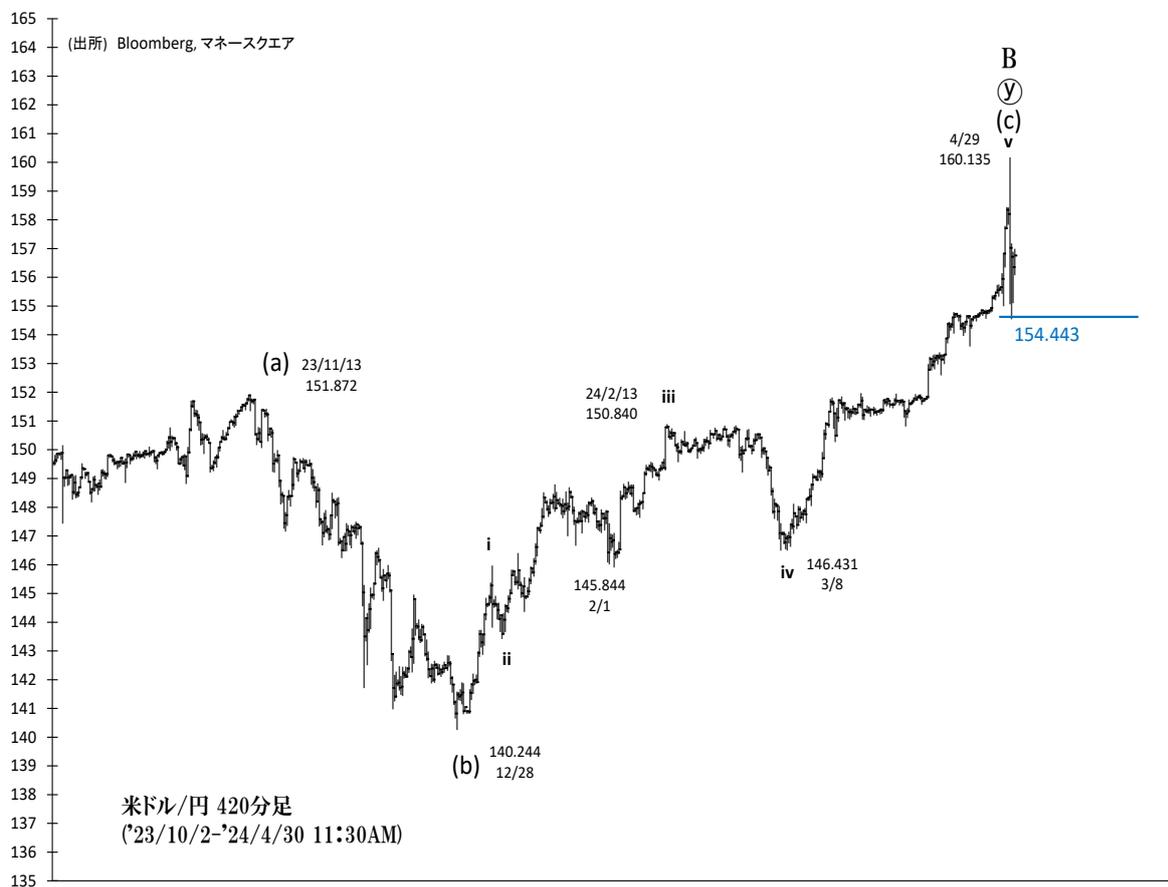
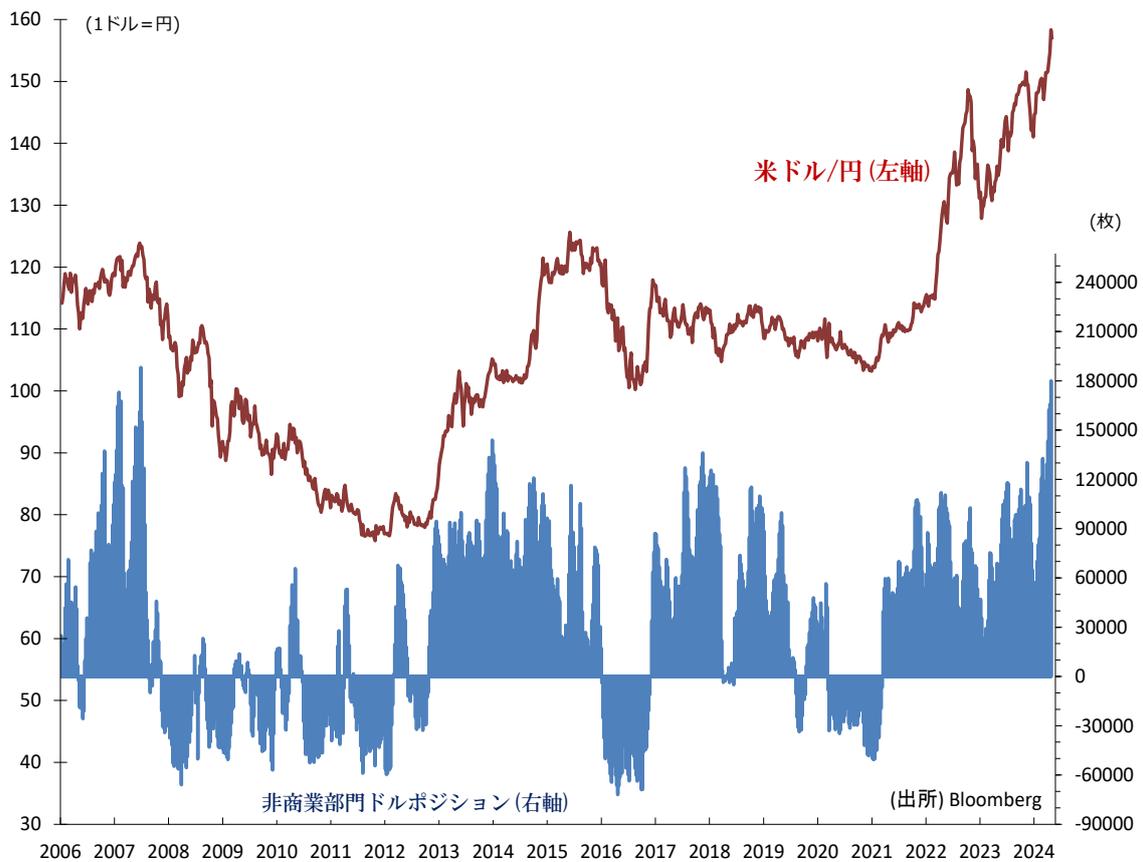
【日足・エリオット波動分析】

127.158 円(23/1/16)からの B 波は[不規則天井(イレギュラートップ)]を付けにいくところです。不規則天井は「強気のパナ(Bull trap pattern)」として知られ、天井を付けてまもなく、逆方向への急激な反動を伴うことが珍しくありません。

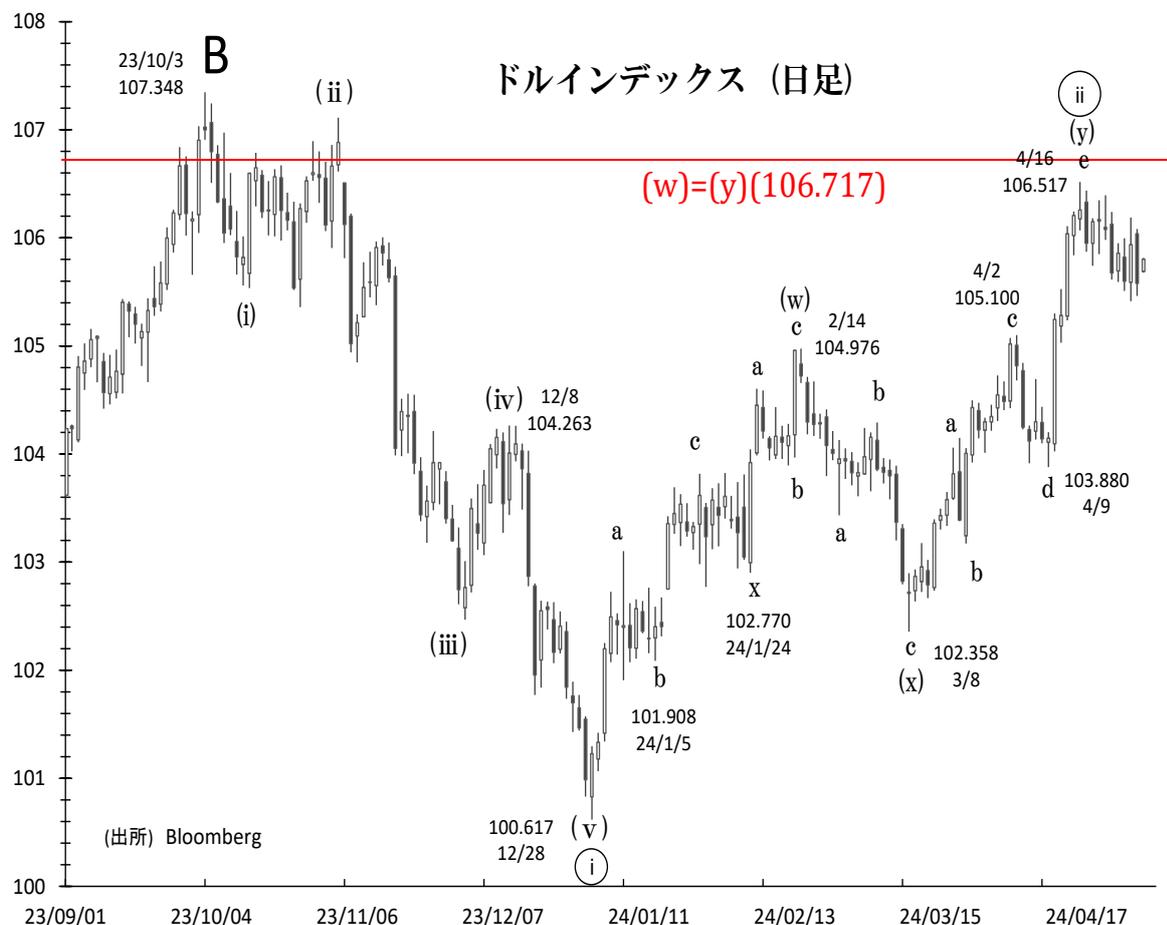
IMM 通貨先物市場における、**投機筋(ヘッジファンド)**による円売りポジションは足元で **18 年ぶり**大きさに膨らんでいます。

このところドル指数の上値は重く、4 月中旬以降はドル高というより円安であり、**投機円売り**が主導しているとみてよいでしょう。ひとたび高水準のポジションを解消する動きが本格化すれば、ドル/円は意外なスケールで下げる可能性があります。

【4 月 30 日 12:34 更新】



ドルインデックス (ドル指数)



【日足・エリオット波動分析】

106.517(4/16)を以て、23年12月安値(100.617)からのドル高は終わったかもしれません。

22年9月高値114.778以来、ドルインデックスは下落トレンドを継続中です。中期的なドル安基調のなかで、波動カウントには現在3つのオプションがあります。

(波動カウント1)

昨年12月安値からはC-マル ii 波によるリバウンドです。106.517(4/16 高値)からは、マル iii 波によるドル安かもしれません。マル iii 波によって、昨年12月安値(100.617)も7月安値(99.578)も、破られることでしょう。

(波動カウント2)

最初のオプションは、昨年7月安値以来のB波が[トライアングル](㊸~㊾)を形成している、というものです。現在はB波中㊾波のドル高局面に相当し、まもなく㊿波のドル安に移ります。

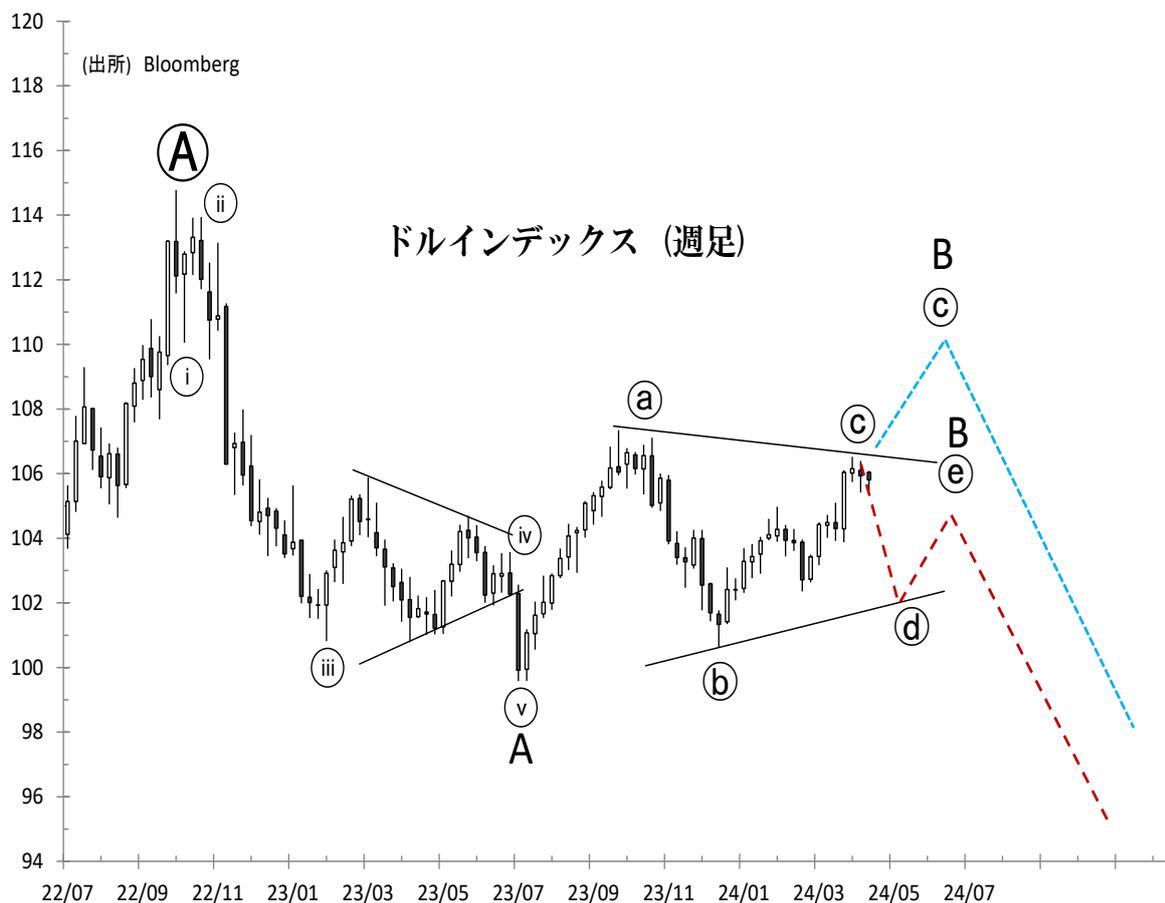
なおこれらの波動カウントは、昨年10月高値(107.348)を上回らないことが前提です。

107.348を上回るケースでは、次のオプションが採用されます。

(波動カウント 3)

昨年7月安値以来のB波が[ジグザグ](a-b-c)で展開中です。昨年12月安値からは©波によるドル高局面です。この波動カウントが正しい場合、ドル安C波開始は先送りされます。

【4月30日 8:08 更新】



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
